

平成 27 年 2 月 19 日

南の風 112

南部ミニバスケットボール連盟
会長 藤原 敬一

スポーツ・インテリジェンスということが、最近よく言われます。

「スポーツ・インテリジェンスとは何か。それはオリンピックを始めとする、国際競技で勝ち抜くための「情報戦略」である。また、相手選手やチーム、試合環境、使用器具等を徹底的に調べ上げ、国家を動かし、中・長期スポーツ戦略を策定することである。」

《スポーツ・インテリジェンス 和久貴洋著より》

広義の解釈では上記のようになるのではないのでしょうか。ここでは、もう少し狭めて考えてみたいと思います。

その前に、先日バスケットボールのトップリーグの運営に携わる方と話した時のことを紹介します。

その方曰く、『日本のスポーツはバスケットボールに限らず、「監督」の存在が絶対的過ぎます。選手も、監督の命令に従うことが最善の行為と思い込んでいます。高校野球が典型です。監督はベンチを出て指導することはできませんが、サインで、野手や投手や走者に「打て」「待て」「バント」「はずせ」「前進守備」「走れ」などの指示を出します。そして、勝利監督インタビューで「選手がよくやってくれました。」と、選手を讃えるような言葉を口にしながら、実は選手たちが自分の作戦の指示に素直に従ったことを評価します。』と書いていました。また、このような監督と選手の関係は、戦前の学校体育にルーツがあるとも言われました。そして戦前の体育教育では、スポーツが求める自発性や創造性が軽視され、集団（チーム）に従属し、規則や先生に服従することが求められたとも話されました。

バスケットボールと野球では、競技の特性（例：野球は攻撃と守りがきちっと分かれている。バスケットボールは攻防が入り乱れる。またバスケットボールにはゲームに時間制限がある等）といった違いがあります。一概には比較することはできませんが、バスケットボールも、監督が主体となってゲーム運営を進めていることには変わりないと言えます。

スポーツ競技の世界では、選手が主体的に状況判断してプレーすることが大事だと言われます。いわゆる、『指示待ち族』選手をつくらないということです。

スポーツ選手の思考力・判断力・決断力等を総合した能力を、「スポーツ・インテリジェンス」と呼んでいます。これは、ビジネスや社会活動にも生かせる能力として高く評価されています。

さてここで、我々が指導しているミニバスケットボール、中学や高校のバスケットボールの活動と、スポーツ・インテリジェンスの関わりについて書きます。

選手が自らの考えや判断でプレーできるようになることは、我々指導者の願いです。瞬時に攻防の場面が変化するバスケットボールのゲームの中で、主体的なプレーができる選手を育てることが究極の目標となります。そのためには選手との関わりや練習の中で、選手が自分で選択してプレーできる場面設定をすることや、自分の意思でプレーできる範囲を広げることです。もちろん経験の浅い選手には、教えることや、指示することが多くなります。しかし指導の根底には、選手が主体的に状況判断し決断してプレーできるようにすることがなければいけないと思います。